MORIOKA
盛岡市

遺跡の学び館

常設展示図録

目　次

ようこそ遺跡の学び館へ ……1
目次・例言 ……2
展示室案内図 ……3
Ⅰ．盛岡の遺跡 ……4
Ⅱ．盛岡の歴史

1縄文時代

土器の誕生 ……6
大きなムラ ……8
小さくなっていくムラ ……11
いろいろな縄文土器 ……12
道具と技術 ……14
縄文時代の交易 ……16
装いと祈り ……18

2弥生・古墳時代

北と南の交流 ……20
北の古墳文化 ……21

3古代

蝦夷のムラ ……22
古代の生活道具 ……24
古代の葬送 ……26
城柵の造営 ……28
城柵支配以降の集落 ……29

4中世・近世

盛岡の平泉文化 ……30
鎌倉時代の居館 ……31
室町～安土桃山時代の城館 ……31
盛岡城跡 ……32
城下町の整備 ……34
大名の墓所 ……35
盛岡の遺跡年表 ……36

例 言

1．本書は盛岡市遺跡の学び館の展示資料を中心に構成した図録です。
2．本書は当館職員、室野秀文・藤村茂克・今野公顕・佐々木亮二・岩城志麻・佐々木紀子・松川光海・鷹觜あゆみの協力を得て三浦陽一が編集しました。
3．本書に記載された遺跡の所在地のうち、盛岡市以外に所在するものについては、遺跡名の後に（　）で県名および市町村名を付しました。
4．本書は、2004年（平成16）６月１日の開館時の展示にもとづいて作成したものです。
5．展示資料の一部については、展示替えを行う場合や他館への貸出し等のため、図録に掲載されていても展示室内に展示されていないことがあります。また、図録に掲載されていないものが展示されていることもあります。
6．図録に掲載されている資料のうち大新町遺跡出土爪形文土器は火災により展示不能となりましたが、破片は展示されています。

展示室案内図

サイトステーション

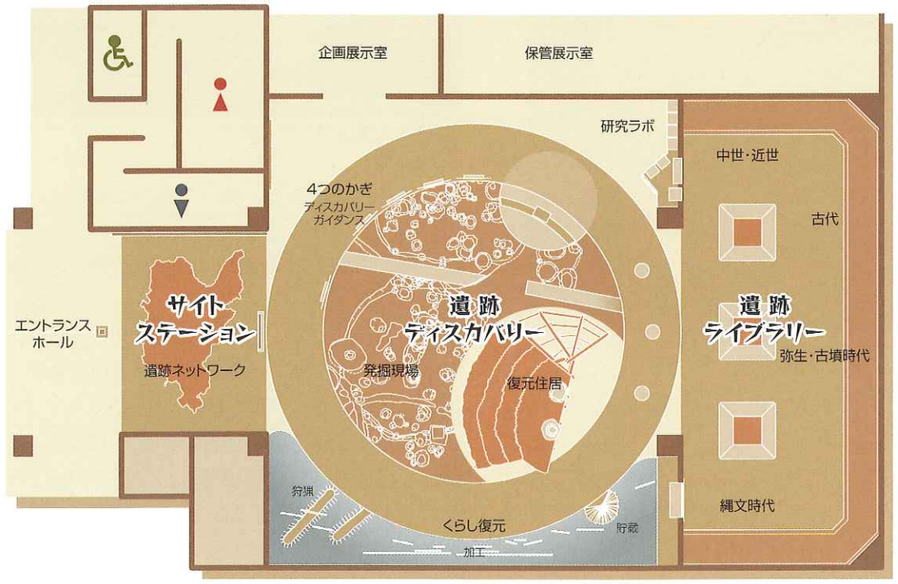
盛岡を中心に主な遺跡の分布を地図上に示しています。

遺跡ディスカバリー
4つのかぎ

遺跡・遺物を見る手がかりとして「遺跡」「遺構」「土器」「道具」の4つのかぎを設定しています。

遺跡ディスカバリー
発掘現場

大館町遺跡の発掘調査現場を再現しています。



遺跡ディスカバリー
くらし復元

縄文時代の狩猟・採集・道具作り・貯蔵の様子です。

遺跡ディスカバリー
復元住居

この住居は、発掘現場で確認された竪穴住居跡をもとに復元しています。住居の構造を発掘現場と比較することができます。

遺跡ライブラリー

時代ごとに市内の代表的な遺跡や出土資料を紹介しています。これからも新しい発見や成果にあわせて展示を更新していきます。

Ⅰ．盛岡の遺跡

昔の人々はどのようなところを生活の場としていたのでしょうか。

サイトステーションでは、映像と床にあらわされた地図で、人々が時代の移り変わりとともに生活の場を移していったことを紹介しています。

縄文時代の遺跡は、川を望む台地上に多くあることがわかっています。今から4500年前、縄文時代中期に最も栄えた大館町遺跡もその一つで、豊かな自然の恩恵を受け１千年の長きにわたってムラが営まれました。

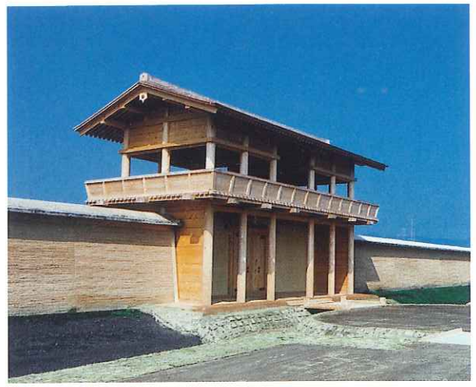
大館町遺跡第53次調査

稲作がはじまる弥生時代から古墳時代にかけての盛岡周辺でのムラの様子はよく判っていませんが、薬師社脇遺跡や永福寺山遺跡から発見された墓や供えられる物に北海道の文化と東北南部の文化の交流が見られます。

土坑墓と遺物出土状況

古墳時代末から奈良時代にかけて川沿いの平野部にムラが多く営まれるようになり、有力者の古墳がつくられるようになります。

平安時代になると朝廷による律令支配が東北北部まで及び、太田の地に志波城が築かれました。志波城は陸奥国最北、最大の城柵でした。



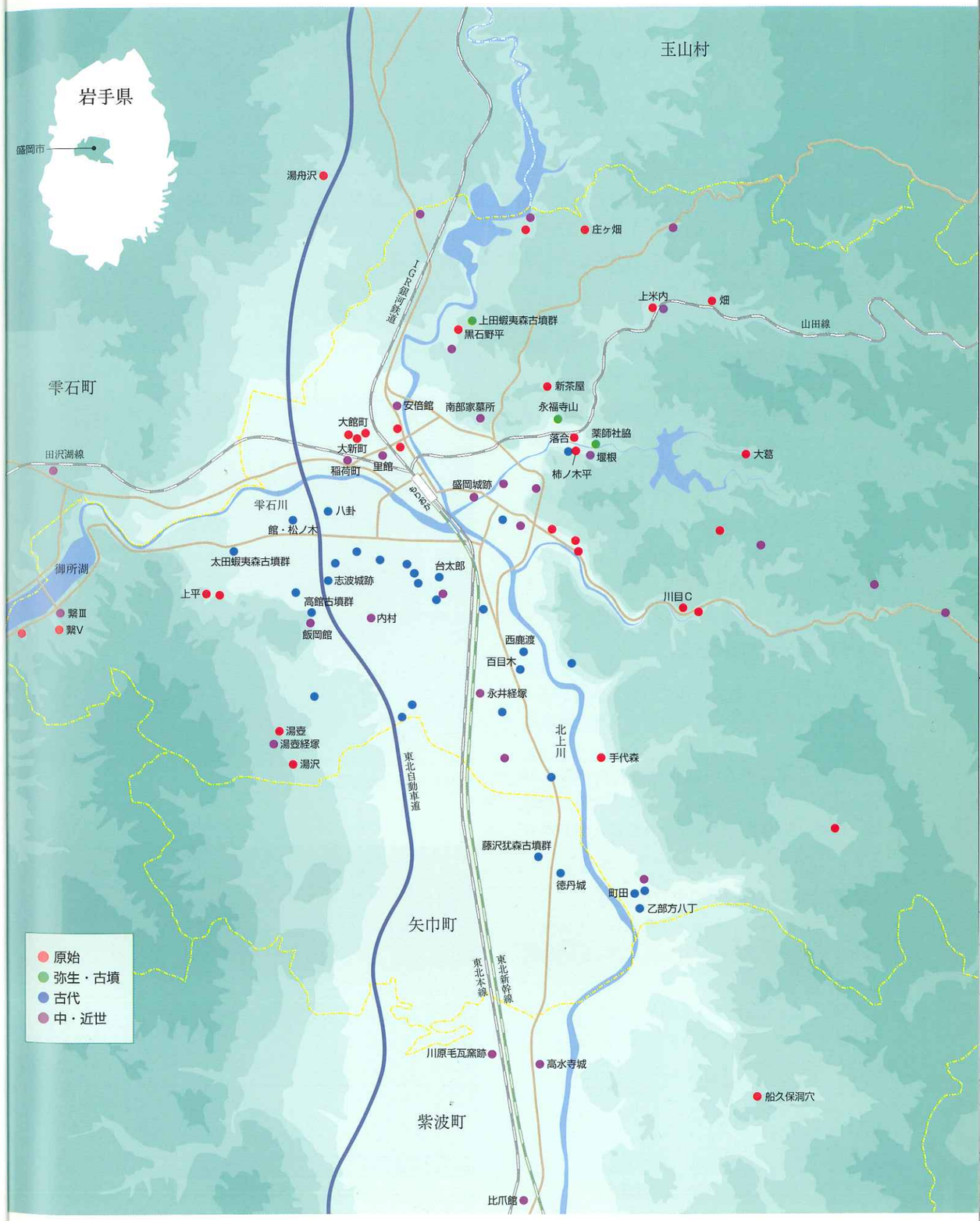
復元された志波城跡外郭南門

鎌倉時代になると、関東の有力な御家人は全国各地に領地を与えられ、一族を派遣しましたが、地方の武士にも領地の支配を任せたと考えられています。

室町時代以降になると領主たちは見晴らしの良いところや交通の要衝に館を築き地域を治めるようになっていきました。

戦国時代を生き抜いた南部氏は、和賀郡まで領地を広げると舟運に便利な地点に盛岡城と城下町をつくり、現在に近い街並みがつくられていきました。

盛岡城跡



1 縄文時代
（約12,000～2,300年前）

**豊かな自然の恵みを受け、
さまざまな地域と交流しつつ
ダイナミックな文化が開花した。**

縄文時代は豊かな自然の恩恵を受け、狩猟・漁撈・採集を中心とした社会です。およそ1万年の間栄えた縄文文化は、自然と共生することで発展していきました。

この中で縄文人は、弓矢や土器など道具の製作技術と、食糧の保存技術を向上させていきます。その結果、ある程度の定住生活を可能とさせ、ムラを形成・維持するようになります。

また、土器文化の広がりやコハクやヒスイが遠くの地域から運ばれてくるなど、さまざまな地域の人や物が交流した時代でもありました。

土器の誕生

今から12,000年ほど前、気候が暖かくなりました。このころの森林には、ドングリなどの木の実が豊富に茂る木がたくさんありましたが、これらの実は煮てアク抜きをしなければ食料とすることはできませんでした。

人々は土器を発明し、煮炊きをすることを可能にし、自然の恵みを最大に受けることができるようになりました。

縄文時代草創期の土器

大新町遺跡から出土した「爪形文土器」は土器の表面に動物の骨などで爪形の文様が施されています。

土器は非常に薄くつくられており、厚さは5mm前後しかありません。当時の人たちが想像以上に高い技術で土器をつくったことがわかります。

縄文時代早期前葉の竪穴住居跡

発見された竪穴住居跡は一辺4～6m程の隅丸長方形で、壁際には屋根をかけるための小さな穴が掘られています。

住居の中からは押型文土器や、石鏃、たたき石などの石器が出土しています

爪形文土器（大新町遺跡）

縄文時代早期前葉の竪穴住居跡（大新町遺跡）

押型文土器（大新町遺跡）

沈線文土器（大新町遺跡）

押型文土器

小さな丸棒に線を刻み、それを回転させながら土器に押し付けて文様をつけています。

V字やX字、菱形や格子目など様々な文様がつけられた土器が出土しています。

沈線文土器

横や斜め方向に細い棒のようなもので文様をつけています。

中には、押型で文様をつけたものに似せているものもあります。

貝殻文土器

サルボウガイやアカガイの腹縁部などを利用し、押圧・押し引きといった手法で文様をつけています。

貝殻文だけではなく、沈線文との組み合わせなど、多彩な文様構成が見られます。

撚糸文土器

撚ったひもを回して文様をつけています。

口縁部に刻目状の文様が施されるものや沈線文を施しているものもあります。

微隆起線文土器

ヘラ状の工具を土器の表面に引いた時に工具の縁からはみ出した粘土を文様化したものと考えられています。

土器の上半分に幾何学的な文様が施されています。

貝殻文土器（新茶屋遺跡・館坂遺跡）

撚糸文土器（大新町遺跡）

微隆起線文土器（宿田遺跡）

いろいろな縄文土器

約12,000年前から2,300年前のおよそ1万年間続いた縄文時代は、土器の特徴をもとに、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の６つの時期に分けられます。

土器は当初深鉢形のものが作られ、煮炊きの道具として使われましたが、浅鉢形土器のように盛り付けに使われたものや、注口土器のように液体を注ぐために使われた土器もあります。

製作技術の向上と生活の多様化から、様々な用途に土器が使われるようになり、色々な種類の土器が作られていました。

特に縄文時代中期になると土器は大型化し、造形的にも優れたものが多く作られるようになります。

日本最大級のキャリパー形深鉢
（高さ93cm）（大館町遺跡）

吊手付土器（柿ノ木平遺跡ほか）

浅鉢形土器（大館町遺跡ほか）

深鉢形土器（繋遺跡・重要文化財）

樽形土器（大館町遺跡）

キャリパー形深鉢（大館町遺跡）

皿形土器（上平遺跡ほか）

台付皿（上平遺跡ほか）

鉢（上平遺跡ほか）

台付鉢（上平遺跡ほか）

注口土器（上平遺跡ほか）

縄文時代晩期の土器

縄文時代晩期の土器は『亀ヶ岡式土器』と呼ばれ、東北地方を中心に北海道から近畿地方までの広い範囲に分布しました。

深鉢形土器や鉢・台付鉢、壺形土器、注口土器などさまざまな器種があり、精緻な文様が浮き彫りされているほか、朱塗りのものもあります。

容器としての機能だけではなく、呪術的な機能を持たせることを目的に作られたものと考えられます。

壺形土器（上平遺跡ほか）

深鉢形土器（湯壺遺跡ほか）

縄文時代の交易

アスファルト・ヒスイ・コハクなど、盛岡から遠く離れた地域でしか手に入らないものが、市内の遺跡から出土することがあります。

このような珍しいものを手に入れるために当時の人々は、直接産地まで取りに行ったのではなく、ムラとムラとの間の物々交換により手に入れたと考えられています。

さらに、広い範囲で似たようなデザインの土器が見つかったり、他地域の特徴を持った土器がみつかることがあります。このことから、多くのものや情報がこの頃にはすでに行き交っていたことを示しています。

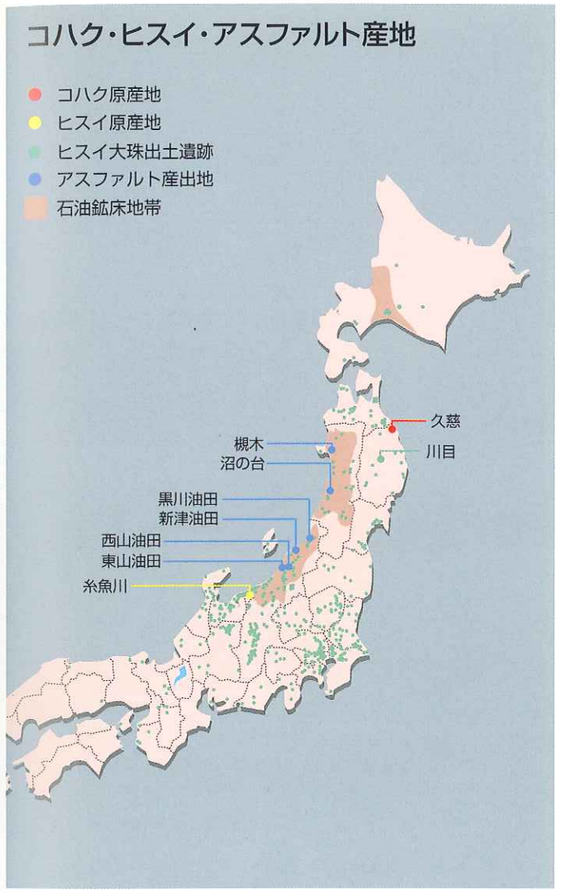
東北南部の影響を受けた土器（大館町遺跡ほか）

ふたつの土器文化

盛岡周辺の縄文集落遺跡からは、縄文時代中期中葉に東北北部を中心とした地域に分布する「円筒式土器」と東北南部を中心に分布した「大木式土器」の両方が出土しているほか、２つの土器文化を折衷させた文様をもつ土器も出土しており、北と南の土器文化の接点であったことがうかがえます。

円筒・大木式土器の分布

円筒上層式土器（大館町遺跡ほか）



ヒスイ・コハク・アスファルトの産地

アスファルトの入った土器（川目Ａ遺跡）

アスファルトの付いた石鏃（湯壺遺跡）

交易拠点のムラ

簗川を見下ろす丘陵上に立地する川目Ｃ遺跡からは、ヒスイを加工した製品が7点出土しています。これだけ多くのヒスイ製品がひとつの遺跡から出土した例は県内にはありません。ペンダント形のものや棒状のものに縦方向の孔を貫通させたものなどがあります。

その他コハクで作られた装飾品や、アスファルトを接着剤として使用した石鏃も出土しており、この遺跡が交易の拠点であったことがわかります。

ヒスイ大珠（川目Ｃ遺跡）

交易によりもたらされたもの

ヒスイは新潟県姫川・青海川の上流が原産地で、コハクは岩手県久慈産のものが大半をしめると考えられています。久慈市は今でもコハクが産出することで有名です。

日本海沿岸では、現在でも小規模な油田が見られるところもあります。特に秋田県下では、昭和町槻木遺跡などのような天然アスファルトの産地があり、古くから特産品として流通したと考えられています。

2 弥生～古墳時代（約2,300～1,400年前）

農耕が徐々に定着する一方、縄文時代の伝統を受け継ぎ北と南の文化が交差した文化が生まれた。

弥生時代になり多くの地域で稲作文化が拡大しますが、東北北部から北海道では縄文文化の伝統が色濃く残っていました。この時代の遺跡は盛岡周辺ではあまり多くはありませんが、西日本の弥生土器の影響を受けた土器も出土するようになります。

古墳時代の盛岡周辺では墳丘や埴輪のある大きな古墳は作られませんでしたが、市内からは北の続縄文文化と在地の弥生文化、南の古墳文化の接点であったことを示す遺跡が確認されています。

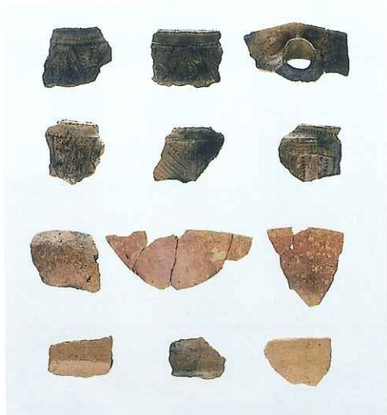
北と南の交流

永福寺山遺跡は、中津川に張り出した丘陵の頂上付近に立地しています。昭和40・41年の発掘調査で、古墳時代前期の土坑墓７基が確認されました。土坑墓からは北海道系の続縄文土器（後北C2-D式）と東北南部の古墳時代土師器（塩釜式）、鉄製の鎌などが出土しました。

これらの遺物は、当時の盛岡周辺が北の続縄文文化、南の古墳文化の接点であったことを示す貴重な資料といえます。

繋Ⅵ遺跡出土弥生土器

永福寺山遺跡発掘調査時の写真（昭和40年）



出土した続縄文土器と土師器片

（参考）秋田県寒川Ⅱ遺跡出土後北式土器
秋田県埋蔵文化財センター提供

続縄文文化

弥生時代に入り多くの地域では採集から農耕へと生活基盤が変化していきましたが、東北北部から北海道にかけては縄文時代の文化や生活様式が色濃く続いていたと考えられています。

この文化は、『続縄文文化』と呼ばれ、縄文土器の伝統を受け継いだ独自の土器が使われていました。

土坑墓

遺物出土状況

出土した土師器

北の古墳文化

薬師社脇遺跡は、中津川と米内川の合流点付近の段丘上に立地しています。これまでの調査で、古墳時代の土坑墓が４基確認されました。

墓の形は、北海道を中心とした続縄文文化に特徴的なもので、壁の一部を袋状に掘りこみ、その中に土器を納めています。

副葬品は東北南部の古墳文化の土師器と多量の鉄製品（鎌・斧など）・ガラス小玉・管玉などが出土しています。

墓の形は続縄文文化、副葬品は古墳文化を取り入れた貴重な資料といえます。

出土した鉄器（鏃、鎌、斧、刀子）

玉類（首飾り、腕輪）

古代の生活道具

奈良時代から平安時代にかけて使われた土器は「土師器」「須恵器」と呼ばれています。「土師器」は素焼きによるもので主に褐色です。「須恵器」は窯を使って生産されたもので硬質に焼きあがり、灰色を呈しています。

これらの土器は、奈良時代には手づくねで作られていましたが、平安時代になるとロクロを使用するようになったため、器の形や規格がほぼ均一化されるようになっていきます。

奈良時代の土器（台太郎遺跡）

平安時代の土器（志波城跡）

大甕（新道Ⅰ遺跡）

平安時代の土器（台太郎遺跡）

ヘラ書土器「上万」「藤部愁」（堰根遺跡）

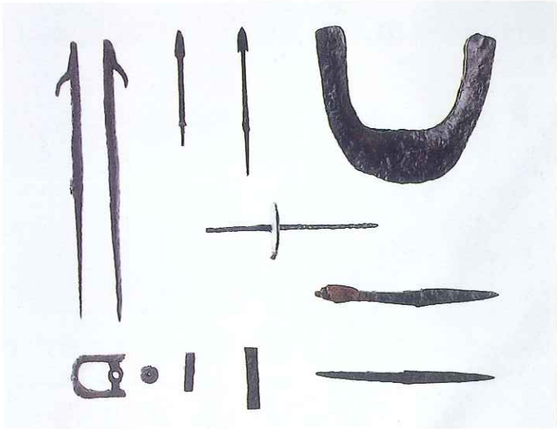
出土した文字資料

古代の竪穴住居跡からは、墨や工具などで文字や記号を記した土器が出土することがあります。

これらは、地名を記すもの、施設を記すもの、吉祥的な文句を記すもの、土器の所有を記すものなどいろいろな意味を持っています。

大半が1文字ないし数文字の単語が圧倒的に多く、文章を記しているものはきわめてまれです。木簡と並ぶ古代の重要な出土文字資料です。

墨書土器「吉」「道」「坏」「仟」「真木」（乙部方八丁遺跡）



出土した鉄器（堰根遺跡）

鉄器の普及

奈良時代以降、鉄製品は農地の拡大や耕作など人々の生活に欠かせない道具となりました。種類も豊富になり、鋤先や鎌などの農耕具、斧や槍鉋・鑿などの工具、鏃や刀・冑・鎧などの武具、轡や鐙などの馬具、鋲や釣針などの漁労具のほか、紡錘車や刀子（小刀）などにも鉄が使用されるようになってきます。

城柵の造営

7世紀半ばから9世紀の初めにかけて、新潟県を含む東北各地に20数ヶ所の城柵が築かれました。

城柵には中央の官人が派遣され、蝦夷たちに物資や位階を与えることで朝廷側の勢力を浸透させる『饗給』、蝦夷の動静を探る『斥候』、反抗する蝦夷の反抗を武力で抑える『征討』という東北以南の行政府（国府など）にはない特別な任務が与えられました。

これまでに行われた発掘調査により、城柵には中心域に築地塀で囲まれた『政庁』が存在したことがわかっています。政庁内部には正殿と東西脇殿がコの字形に配置され、それら建物に囲まれた広場で、朝貢する蝦夷に位階や禄物をあたえてもてなす儀式（『饗給』）がおこなわれていました。

さらに城柵には、他の地方官衙と異なり、多くの兵士が駐屯していました。このことから城柵は一般的な地方官衙ではく国家的な威信を持って蝦夷たちと接触する場であったことがわかります。

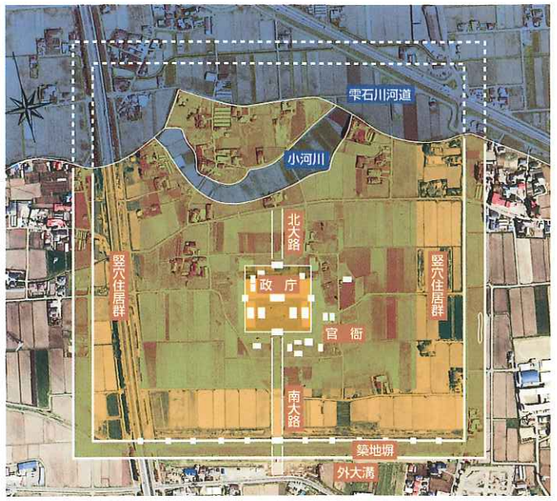
志波城跡

志波城跡は雫石川南岸の段丘上に立地しています。延暦22年（803）、坂上田村麻呂により造営された古代陸奥国最北端の城柵で、外郭や政庁の規模は、国府多賀城に匹敵する最大級のものでした。

外郭は、築地塀（土をつき固めた塀）と土塁をともなう外大溝の二重に区画されていますが、北辺は雫石川の氾濫により削られ、残っていません。

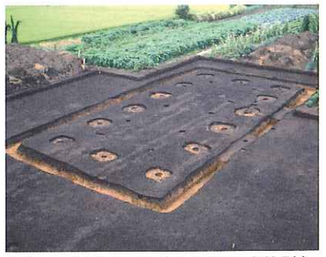
城内の中央には政庁（儀式機能）、その周囲に官衙建物群（行政実務機能）、外郭沿いには竪穴住居群（兵舎や工房）が配置されていました。

しかし、雫石川の水害に度々あうことから、わずか10年で南の徳丹城（矢巾町）にその機能を移すことになります。



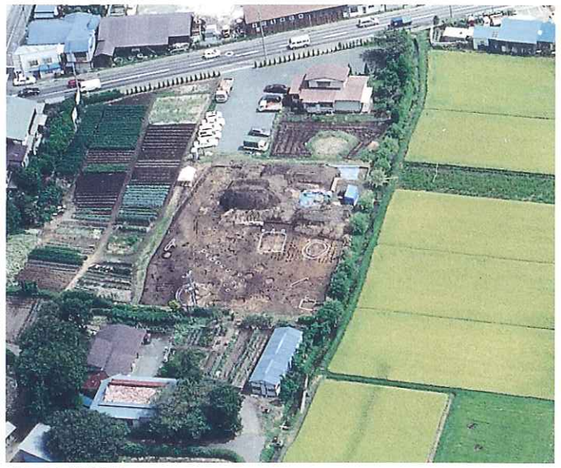
志波城跡体図

復元された政庁南門と地塀・目隠塀


政庁内北西建物（ＳＢ571建物跡）

古代城柵の分布と造営年代

掘立柱建物跡（林崎遺跡）


飯岡才川遺跡
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター提供

堰根遺跡

城柵支配以降の集落

城柵支配以降の社会は、在地の有力者が城柵支配の地盤を受け継ぎ、安定した社会が続いたものと考えられます。また、奈良時代には集落がなかったところにも集落が営まれるようになっていきます。

志波城跡の東側に隣接する林崎遺跡や中津川と米内川の合流点近くの堰根遺跡からは、竪穴住居跡のほか大型の掘立柱建物跡が確認されており、宗教的儀式を行うことによって権威を高めようとした在地有力者の居住地と考えられています。

また、高床倉庫と考えられる掘立柱建物が伴う集落が増え、飯岡才川遺跡や小幅遺跡・細谷地遺跡などで確認されています。

掘立柱建物跡（堰根遺跡）

4 中世・近世（約800～150年前）

奥州藤原氏の時代から、戦乱の世を経て南部氏による城下町「もりおか」が誕生する。

盛岡の平安時代から中世への移行期は、奥州藤原氏による平泉政権下にありました。藤原氏は北方との交易を掌握するほか、都の文化も盛んに取り入れました。

藤原氏が滅び鎌倉時代になると御家人や在地領主による地域支配が始まりました。彼らは見晴らしの良い所や交通の要衝に館を築き、領地を支配しました。

室町時代になると、各地へ移入した領主が地域支配を強め、互いに勢力争いを激化させます。特に室町時代末の盛岡周辺は、斯波氏と南部氏との戦いが幾度となく行われました。数々の戦を乗り越えた南部氏は三戸から不来方の地に本拠を移し、盛岡城および城下町の建設を進めていきます。

盛岡の平泉文化

堰根遺跡では、掘立柱建物跡や竪穴建物跡などが確認されており、これらで構成された当時の村の様子を知ることができる数少ない遺跡です。

出土した土器は、平泉町にある柳之御所遺跡で出土したものと同じ時期のもので、素焼きの『かわらけ』のほか愛知県の常滑で生産された壷や甕、中国で生産された白磁・青磁の碗など当時の貴重な品々が出土しています。

このことから平泉文化の影響を色濃く受けた地域であり、有力な領主が屋敷を構えたと考えられます。

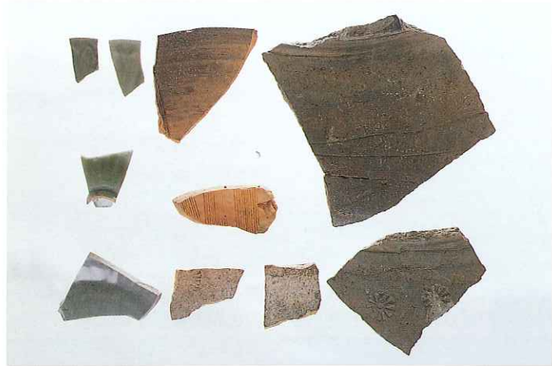
堰根遺跡

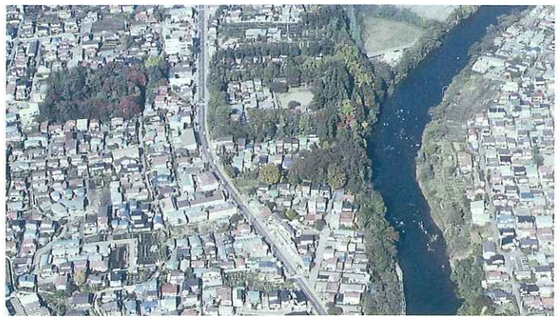
常滑産片口鉢（堰根遺跡）

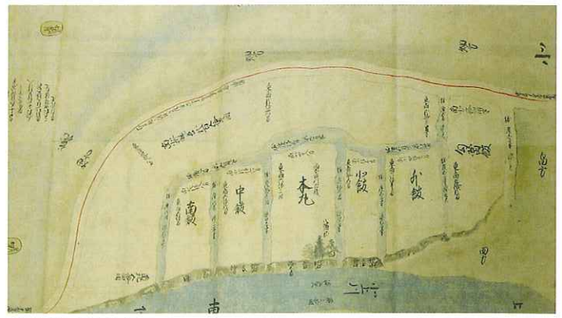
陶磁器（堰根遺跡）

主な陶磁器生産地の図

台太郎遺跡


陶磁器（台太郎遺跡）


安倍館遺跡（厨川城跡）全景


栗谷川古城図

鎌倉時代の居館

鎌倉時代になると御家人や在地領主による地域支配が始まりました。領主たちは、交通の要衝や水利権を掌握できるところに居館を築きました。

台太郎遺跡では、鎌倉時代後半～南北朝時代にかけての、不整五角形に堀をめぐらせた内部に掘立柱建物群を配置させた居館跡が確認されています。また、その周辺には宗教施設や墓域の存在が認められます。

室町～安土桃山時代の城館

交通の要衝や見晴らしの良いところなどに城館が築かれます。自然地形をうまく利用しながら、堀や土塁を構築することで守備を高めています。

これら城館は規模の大小があり、小さなものは土豪や村落領主のもの、大規模なものは各地域をまとめる国人領主や大名が拠点とした城と考えられています。

城館跡からは陶磁器などの焼き物のほか、武具・農耕具などの金属製品、木製品など様々なものが出土します。特に陶磁器では、染付・青磁といった中国からもたらされたものや、瀬戸・美濃など国内で生産され持ち込まれたものが出土しています。

城館の規模や出土遺物からは、城主の階層や生活様式を考えることができます。

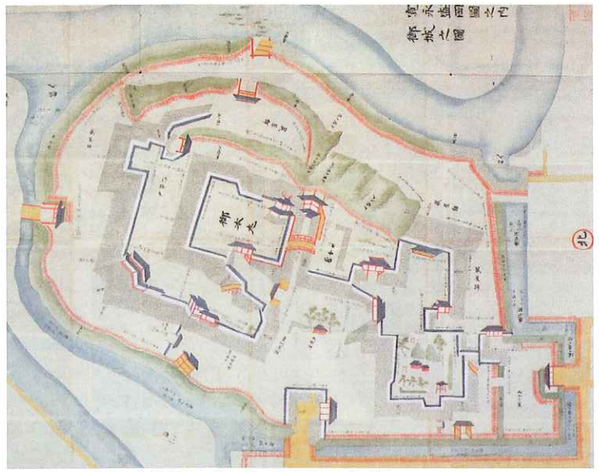
陶磁器（安倍館遺跡）

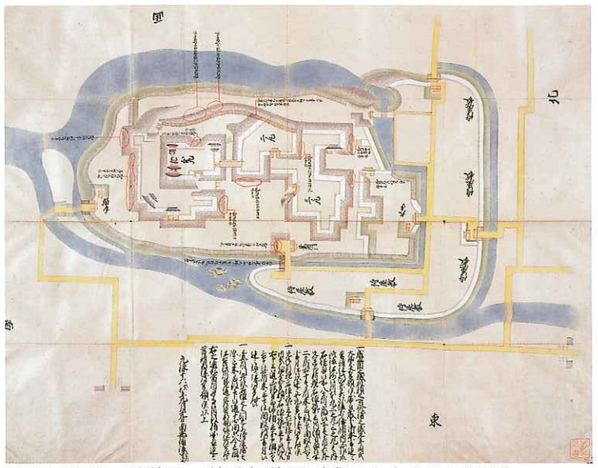
盛岡城跡

盛岡城は、北上川と中津川の合流点につくられた盛岡藩南部氏の居城です。南部信直・利直父子により築城が開始されて以来、江戸時代を通じて歴代藩主の居城となり、盛岡藩政の中心となりました。

盛岡城の基本構成は、2つの川に囲まれた内曲輪（御城内）、その北から東方へ順に外曲輪・遠曲輪を配置した3重構造となっており、北側を大手として設計されています。花崗岩で築かれた石垣は雄大で、国内でも屈指の石垣です。

盛岡城跡（内曲輪）

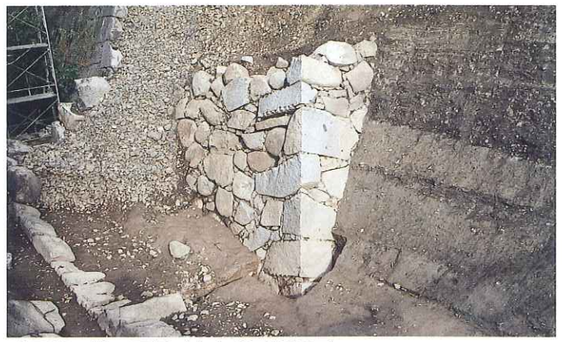

寛永年間盛岡城絵図（盛岡市中央公民館蔵）


元禄16年盛岡城絵図　普請伺絵図（盛岡市中央公民館蔵）

盛岡城・城下関連略年表

天正19年（1591）	浅野長政らから「不来方」の地へ築城の勧奨を得る。
慶長２年（1597）	3月6日盛岡城築城鋤初め。
慶長３年（1598）	盛岡城築城許可？
慶長５年（1600）	盛岡城一応の完成。
慶長14年（1608）	城下町並の整備一応の完成。
元和３年（1617）	第２期工事始まる。
延宝２年（1673）	北上川切り替え工事
明治７年（1974）	城内建物払い下げ、取り壊し

盛岡城古写真（明治初期）


盛岡城１期の石垣（本丸南西部地下）

盛岡城２期の石垣（腰曲輪南西部）

盛岡城３期の石垣（二の丸西側）

石垣の変遷

盛岡城1期

慶長2・3年～（1597・1598年～）

南部氏により築城がおこなわれた時期です。福士氏の城館であった不来方城の縄張を活用しながら、本丸・二の丸などに野面石を多用した石垣が構築されます。

盛岡城2期

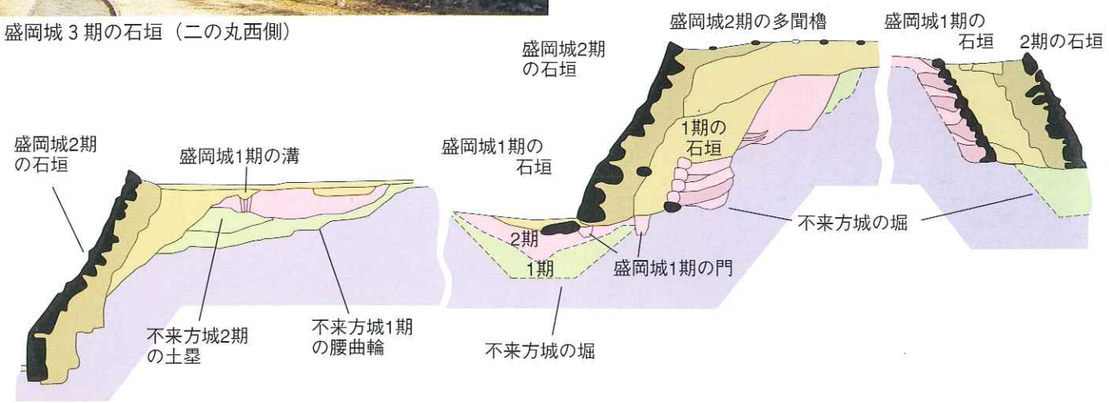
元和3年～（1617～）

元和3年（1617）の大改修にはじまるもので、本丸や二の丸の拡張のほか、三の丸・腰曲輪にも粗い割石による石垣が構築されます。

盛岡城3期

寛文7年～明治７年（1667～1874）

寛永年間に焼失した本丸の再建や内曲輪西側を流れていた北上川の切り替え工事などがおこなわれています。これにともない、内曲輪の西面に規格化された割石による石垣が構築されました。



盛岡城石垣断面模式図